



楊柳文庫

卷八

~ 13  
3330  
14



13  
3330  
14

二十五

去通陽柳文庫卷之拾六

目錄

一 内山先生書の長物へうすけの目見の事いせ

一 長物へうすけ三年款の長家ちやうけを知る事しる

一 長物へうすけ再またびお伴おばんの長家ちやうけの本ほんの事こと

一 長物へうすけお伴おばんの長家ちやうけの事こと



大正十八年九月廿九日  
本大學出版部贈



小川

長通陽柳文庫卷之拾六

中右女ちうさめの長脚ながあしは長見ながみの年とし

長物ながもの北三年きたさんねん教のうの長家ながいえをさるる年とし

あもあも同山どうさん中右女ちうさめの長脚ながあしの三年さんねんあ  
を長物ながもの研けんひ合あ合あ子こをらみらみて長脚ながあし  
のくのくのの長ながくく長ながくくああををはは長なが脚あしの  
とと少すく少すくををううくくひひくく長なが脚あしををささるる年とし

いあ筆と筆通——てまの底を  
きぐ——まこと海——は似合也  
ろ——そんおちればまじりの  
ちたよあそむまじり——なま染上遠  
ざうり<sup>い</sup>なまり——なまえ半ぬを  
くせりのちねはるちぬちあそ  
りしのよは活多氏を切を——  
奪のち多の金ももつれはは  
かき

がしめて<sup>うし</sup>名ぬいちり——<sup>ち</sup>  
右の<sup>この</sup>みの<sup>ちり</sup>とまをえて  
あそむ<sup>あそむ</sup>ちり<sup>ちり</sup>——<sup>ちり</sup>  
の<sup>あそむ</sup>半も<sup>ちり</sup>ぬ<sup>ちり</sup>ま<sup>ちり</sup>——<sup>ちり</sup>  
ま<sup>あそむ</sup>つ<sup>あそむ</sup>を<sup>あそむ</sup>う<sup>あそむ</sup>も<sup>あそむ</sup>ま<sup>あそむ</sup>——<sup>あそむ</sup>  
り<sup>あそむ</sup>く<sup>あそむ</sup>無<sup>あそむ</sup>物<sup>あそむ</sup>も<sup>あそむ</sup>ま<sup>あそむ</sup>を<sup>あそむ</sup>う<sup>あそむ</sup>  
い<sup>あそむ</sup>ま<sup>あそむ</sup>の<sup>あそむ</sup>ま<sup>あそむ</sup>も<sup>あそむ</sup>ま<sup>あそむ</sup>び<sup>あそむ</sup>——<sup>あそむ</sup>  
——<sup>あそむ</sup>い<sup>あそむ</sup>ま<sup>あそむ</sup>も<sup>あそむ</sup>ま<sup>あそむ</sup>び<sup>あそむ</sup>——<sup>あそむ</sup>

この際家を侍申して房波の女  
引出で舟のうちの毎金を牛  
くんとすしめりちりくを申しを  
子にひが或日無物に海邊を  
よして表をめぐり海原の船を  
まはしりて山にたのむにや  
う一日堂よりあふゆらしとす  
と依り留神の降るおのる

目下付合へが後家もも欲の  
海をのりしと歩水をやらる女  
氣の配をう母の血利養申て  
産駒を討し申のと一白こめて  
をらるを無物そらとらる  
がしのお志むとてえ違らお仲  
がう一物つくぐとえとてこ  
在りあふよ家くもとらる果

一も業を不潔にして  
のあむ引もまねねん  
陰の身とはぬまら  
も病舎なりりとねり  
をうして身法へ引  
まゝ一まより所の後  
つゞくは後家  
をわすれしと肝  
のつゞくは後家  
をわすれしと肝

を後より行くと  
もまゝにして  
あまよく入ると  
一と無  
家を口  
る物  
を  
く半







金きん子すの武ぶ十じゅう支しををどどくく用ようをを  
ううららいいわわととりりののくくしし少せう物ぶつををとり  
てて也やののくくううまましししし物ぶつををととり  
のの味あじややももししちちはは百ひゃく古こががお  
ままちちわわららももああまましし金きんをを酒しゆ  
ままちちちちちちののここややししははああららるる  
むむののくくままちちちちちちとと因いんにに  
ししてて美み法はうののああくく引ひ上ありりしししし

金きん子すの武ぶ十じゅう支しををどどくく用ようをを  
ううららいいわわととりりののくくしし少せう物ぶつををとり  
てて也やののくくううまましししし物ぶつををととり  
のの味あじややももししちちはは百ひゃく古こががお  
ままちちわわららももああまましし金きんをを酒しゆ  
ままちちちちちちののここややししははああららるる  
むむののくくままちちちちちちとと因いんにに  
ししてて美み法はうののああくく引ひ上ありりしししし





とくし金武千支くしきくし  
まうしはひ文も早くし用牛を  
付身心来ふまよあまのそまう  
霧はりしとつふをき物あし止  
め何んを毛もゆれ今を月あつしそ  
あまの早くしゆきしとつとつ  
どしゆきもき右馬の初の人目まゆ  
そまうとつび今うしゆきををりゆ

いしそ川で夜をひきしきく  
何の旅舎とゆきしきくまきま  
ゆきゆきしとまきまのい文づくら  
いしそ川きくしゆきゆき  
あまゆき三平のゆきゆきのくき  
をきゆきまきまゆきゆきの  
まきまゆきゆきゆきゆきゆき  
まきまゆきゆきゆきゆきゆき





のうらたれお侍侍くらの  
ゆうは信牡丹のつゆをさう  
せんうらたれお奉がえのうら  
をくくたれくくうらま御  
三年まはくくうらま御  
此とつらうは命能ふまは二口又  
あまは長遠あまはあまはあまは  
のちあまはあまはあまはあまは

秋の菊もくくつゆの養育  
修くくくくくくくくくくく  
あまはあまはあまはあまは  
をらあまはあまはあまは  
あまはあまはあまはあまは  
あまはあまはあまはあまは  
あまはあまはあまはあまは  
あまはあまはあまはあまは  
あまはあまはあまはあまは







その一 危法師と云くは  
あはれに死すなりしその如く  
又申すは海世のいとちもなり  
か多し一 危法師の歌も  
未だ多しなり 旨をいまして  
どの歌を付くふいぢき  
しゆよりあつかりぬ  
多しなり 劇席と云くは

おきを請ふ 一 又云は  
とま帰るはぬまの歌  
を付せり 一 けしき  
が後ある曾我を  
しと死を付く 一 ち  
色くは後へ 一 ち  
後家の娘 一 ち  
めいどけちく 一 ち

い新をよ戻と結りるるや〜再返  
きし〜ちねも〜  
よまろぐひ私ををちがさとも款  
い誰とも結れざれば款付をしね  
もあ〜〜の性名さくあ  
てあ〜をとげ〜事〜  
い新〜ともあ右あ〜も  
さ〜あ〜ば〜

い推量とらんむけの無助なまし  
命〜あをぬ〜お伴がもう〜  
と〜あ〜びまの氣をひ〜  
う〜きと〜一口又さ〜  
あ〜のあ〜え〜あね〜  
よ〜あ〜あ〜  
の〜あ〜や〜と款を付せり  
きしと〜たつ〜を〜









かよふあはれ  
お不浄丹所よあひて人まね  
ま切義せんぎ——多たなるわらわも  
この幸さいいりもど後ご家のきよぶ  
しして是津それなるしと身みなるわ  
いそねもち——そねゆら  
中ちゆうとくともよ入いりなる文ぶんの  
新あらたを造つくるし——ちのまこと  
病びやうけしなる半はんじもくあは

いそねもち  
ちのまこと  
はんじもく  
あはれ

武左陽柳文庫是之松本



